



# 日本の応用言語学研究の現状と課題 : 今後の方向性と論点の整理

山中, 司

---

**(Citation)**

神戸大学国際コミュニケーションセンター論集, 21:1-15

**(Issue Date)**

2025-03-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100493616>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493616>



## 日本の応用言語学研究の現状と課題

### —今後の方向性と論点の整理—

山中 司

神戸大学 大学教育推進機構(非常勤講師)

## The Current State and Challenges of Applied Linguistics Research in Japan

### —Future Directions and Key Issues—

YAMANAKA, Tsukasa

Kobe University, IPHE (Part-time Lecturer)

#### Abstract

This study examines the current state and challenges of applied linguistics research in Japan, analyzing its academic positioning both domestically and globally. While applied linguistics has established itself as an independent field internationally, Japanese applied linguistics research has yet to fully consolidate its identity and scholarly influence. Through an examination of external and internal factors affecting its development, this paper highlights key issues such as the lack of unified theoretical frameworks, the dominance of language education research, and the absence of an integrated academic platform for researchers across subfields.

In addressing these challenges, the paper proposes three strategic approaches: (1) establishing overarching research themes that can connect diverse subfields, (2) fostering applied linguistics curators who facilitate interdisciplinary collaboration, and (3) implementing model projects that demonstrate the practical and societal impact of applied linguistics research. These initiatives aim to create a more cohesive and internationally recognized research community in Japan.

By offering a critical analysis of the structural issues facing Japanese applied linguistics, this study provides a foundation for discussions on its future directions. It emphasizes the need for increased academic integration, theoretical consolidation, and enhanced global engagement to ensure the sustained development of applied linguistics in Japan.

キーワード

Applied linguistics, Japan, language education, interdisciplinary research,  
theoretical frameworks, academic development

1. はじめに

本論考は、日本の応用言語学研究に関する現状を把握し、抱えている課題を整理するために執筆したものである。世界を見渡してみれば、例えば国際応用言語学会 (Association Internationale de Linguistique Appliquée; AILA) や、アメリカ応用言語学会 (American Association For Applied Linguistics; AAAL) など大規模な国際学会が存在し、*Applied Linguistics* (Oxford University Press) や *Annual Review of Applied Linguistics* (Cambridge University Press) をはじめとする権威あるジャーナルも多数存在している。一方で、日本国内の応用言語学研究は質量共に未だ十分ではないとする見方が一般的であろう。日本の応用言語学研究の学会的組織としては、AILA より唯一のアフィリエーションを許された JACET (一般社団法人 大学英語教育学会) 内に JAAL in JACET (日本応用言語学会; Japan Association for Applied Linguistics) があるが、日本独自の応用言語学研究がここに結集し、世界に向けた発信が盛んに行えているかと言えば必ずしもそうではない。応用言語学としての「まとまり」をもって学会や研究が動くことが歴史的に少なかった日本であるが、他方で、応用言語学が新たに既存の英語教育研究やそれに関連する諸分野を束ねることができたならば、これまでとは異なった切り口で研究と実践に新たな活力を与えることができるであろう。

応用言語学自体が比較的新しい学問であり、世界の応用言語学も現在進行形で変化し続けている。こうした事情もあるにせよ、日本の応用言語学研究そのものを対象とした論考は未だ少ない。本稿で論じることができる範囲は限られるが、次なる議論の叩き台として、若干の論点整理に少しでも貢献できればと考えている。

2. 日本の応用言語学研究の現状と課題

早速であるが、日本の応用言語学を取り巻く状況について、その特徴的な様子を外因として 2 点、内因として 2 点指摘したい。これらはいわゆる応用言語学が持つ問題意識とも通底するものであり、現状イコール課題として提示するものである。本章が挙げる 4 つの点が、日本の応用言語学が抱え持つ現状の問題把握をどれだけ達成できているかは分からない。しかしながら、まずはこのような特徴が提示されることで、日本の応用言語学研究の実態について少しでも輪郭を明らかにしたい。

<外因 1> 応用言語学はもはや独立した学問である

まず本稿が用いる外因と内因という語句について説明しておきたい。外因とは、日本固有の事情というよりは、グローバルに語られる応用言語学に備わる要因という意味で用いている。本稿の目的は日本国内の応用言語学の事情を論点整理することであるが、当然、国内事情は海外事情

に影響を受けるに違いなく、そもそも海外で生まれ、育ってきた応用言語学であるが故に、国内事情にも大いに影響を与えると想定し指摘している。また、こうした要因は必ずしも問題であるとは限らないが、大いに影響力を持つと考えられ、あえて取り上げている。

外因1は、応用言語学がもはや独立した学問であることを指摘するものであるが、この指摘には多少の説明が必要であろう。若林(2022)も述べる通り、応用言語学にはそれが「言語学の応用か」、「応用言語学そのもの」という議論が長く存在した。もちろんこうした議論に決着がついているわけではなく、言語学の延長線上に応用言語学を置く言語学や英語学系の出版物も未だ存在するし、後者のように、応用言語学を独立した学問分野として捉える出版物も少なくない。ただし、昨今の議論は、どちらかと言えば後者が優先になりつつあると考えて良いだろう。無論、これには、応用言語学独自の領域や貢献を主張した Widdowson(2000)や Hall ほか(2017), Oda(2021)などのスピーカーの存在も大きい。一方、次の要因として指摘する現代の応用言語学特有の「肥大化」の問題があり、その領域が無尽蔵に拡張するという理由もあると思われる。いずれにしても、応用言語学はそれ自身、言語学の一部としてささやかな位置付けを占めるというよりは、積極的に独立した一分野としてその領域を確立させている、もしくはさせようとしていると考えて構わないだろう。日本の応用言語学はそれ自体が未だ勢いのあるものではないが、今後、日本の応用言語学研究を発展させることを目論むならば、現に本稿はそれを目論むが、それ自体が完結した一領域として十分に独立できるだけのものにしていかなければいけないということである。もちろんこれは、言語学との接点を切らなければいけないとか、言語学会と協働してはいけないということの意味しない。しかしながら、もはや応用言語学は言語学にパラサイトしたり、そのアネックス(別館)として存在して研究されるものではなく、あくまで自己完結できる分野を目指すということが、応用言語学の学問的潮流でもあることを理解しておくべきだろう。

なお、本点に関しては3点ほど指摘できることがある。まず1点目は、これは次点で述べる要因2とも関係するが、応用言語学が特異な形で際限ない成長を見せている現在、その弊害として応用言語学としての統一理論の欠如に関しては今後深刻な問題となるように思われる。特に致命的なのは、応用言語学の研究を推進するにあたり、その統一された方法論が無く、確立しようとしていないことである。もちろん科学としての学問研究である限り、統計的な実証やその他の心理学的手法を用いた解析、質的研究やトライアングレーションなど、一般的な研究に用いられる方法論を用いて多くの研究が行われているが、それらは応用言語学固有のものではない。応用言語学が範疇とする分野の研究において、それをどう研究するのかという統一的方法論を欠いているのに、これが学問と言えぬのかという手厳しい批判も存在するように思う(山中: 2019)。

2点目は、確かに言語学と応用言語学には学問として互いの袂を分かつような決定的な点は存在するように思われる。それが、現実への注視か、科学への拘りかの違いであるように考えられる。山中・神原(2023)で述べた通り、純粋科学たらんことを欲す言語学は、理論的であろうとするために、議論は大いに抽象化する傾向があり、その結論は教育的ではない。もちろん科学であるから教育的な結論を期待する必要もないのであるが、これは応用言語学の中でもその大部分を占める言語教育の立場からしたらあり得ないことになる。言語について研究し、その解明を行うことは、いず

れそれを教えることになる言語教育に活かされることを言語教師は期待する。しかし言語学はそんなことは関係ない。かつての応用言語学は、特に生成文法が極端に理論に走り、現実の社会や認知を置き去りにしたことから起こってきた社会言語学や認知意味論をベースにしている。つまり、逆に応用言語学が拘るスタンスは徹底的な現実への直視であり、貢献にある。研究をする限りにおいて、現実の言語を取り巻く課題、それは教育であったり政策であったりするわけであるが、そこへの示唆や貢献に資することを目指すわけである。しかし応用言語学にも弱点はある。相手のある教育であるから、科学的研究が持つべき一般性や普遍性、再現性などの特徴が期待されるのであるが、多くの応用言語学研究にはこれが当てはまらない。したがって、これが科学であるのかという手厳しい批判が応用言語学に対して存在してしまうのである。

3点目は、応用言語学としての独立が可能かどうかの点であるが、研究の深みや広がり議論を横に置けば、応用言語学の大部分を実質的に占める言語教育・外国語教育は現状でも十分な規模を誇っており、特に小学校から大学まで、英語教育が実質的に必修である日本において、英語教師、そしてその英語教育を研究する研究者はこれからも健在であるように思われる。したがって言語学と応用言語学が実質的に袂を分かつとしても、応用言語学が規模的に存在できなくなることは全くない。これは日本も、世界も同じである。しかしながら、人数や規模が十分であるということと、学問分野や研究体系としてしっかりと存立できるかは別問題である。特に日本の応用言語学は言語教育研究が圧倒しており、言わば、言語学と言語教育のような袂の分かれ方になっている。これでは言語学が研究、言語教育が実践と見做されても致し方なく、応用言語学が理論的に弱いという指摘はここでも当たってしまうのである。

<外因2> 応用言語学は際限なく肥大化し收拾がつかなくなっている

Cook(2015)が示した論文は、応用言語学に長く付き合ってきたCookが、その現状を痛烈に風刺したものだと考えるべきである(山中: 2023)。当該の論文では、現在の鳥類がかつては恐竜であったことをメタファーに論が展開するが、要するに、今の鳥からかつての恐竜が想像もつかないように、かつての応用言語学は、今となっては原形を留めないほど変質してしまったことをある種「嘆いた」論文である。現に、昨今の応用言語学の肥大化には驚くべきものがあり、言語に関する実社会と結びついた研究であれば、基本的にはありとあらゆるものが応用言語学となりうる。もちろんそうであっても基本的には構わないわけであるが、その程度が尋常ではなく甚だしいということだろう。以下少し長くなるが、直近の世界的な応用言語学会の開催である AILA 2024(11-16, August 2024)における14の発表カテゴリー(TRACK)と、その下位区分としての関連テーマについて記載したい(<https://aila2024.com/call-for-proposals/#top>より転載)。

#### TRACK 1: LANGUAGE DIVERSITY, INCLUSIVITY AND SUSTAINABILITY

- Language and the Sustainable Development Goals (SDGs)
- Minority Languages and Indigenous Languages Across the Globe
- Lingua Franca, Global Language(s), Dialects

- Language Immersion, Heritage, and Minority Education
- Others

#### TRACK 2: LANGUAGE IN PROFESSIONAL PRACTICES AND PROFESSIONAL CONTEXTS

- Language and the Law
- Language and Forensic Linguistics
- Language and Health
- Language in the Workplace
- Language and the Environment
- Language in Diverse Professions (tourism, gastronomy, arts, fashion, retail, marine, aviation, etc.)
- Others

#### TRACK 3: LANGUAGES FOR SPECIFIC PURPOSES (LSP), BUSINESS AND PROFESSIONAL COMMUNICATION

- LSP and Languages Skills
- ESP Research (EAP, EOP, EST, etc.)
- Business English, Aviation English
- LSP and Pedagogy (needs analysis, genre analysis, assessment, technology, curriculum, etc.)
- Research Methodologies and Perspectives in LSP Research
- Others

#### TRACK 4: LINGUISTICS AND SOCIAL ISSUES

- Linguistic (In)Justice,
- Language and Power,
- Advocacy, Attitude & Bias,
- Diversity-Emancipation and Discriminations,
- Ethnicity and Gender
- Ideology, Language and Social Justice
- Others

#### TRACK 5: LANGUAGES IN SOCIETY

- Bilingualism, Multilingualism, Plurilingualism
- Translinguistics & Translingualism

- Multilingual Classroom, Translanguaging, and Plurilingualism
- Heritage Language, Home Language, Migrant Language
- Language-based Learning Disabilities/Impairment (signs, gestures, etc.)
- Language, Culture, and Socialisation
- Post-Colonial and Globalisation in Language Education
- Language Identity and Identity in Language Education
- Linguistic Imperialism
- Others

#### TRACK 6: LANGUAGE IN USE

- Multimodal Discourse (semiotics, signs and language, and symbols, artifacts, etc.)
- Communication and Interaction
- Conversational Analysis
- Pragmatics Studies and Sociolinguistics
- Language Maintenance and Revitalization
- Discourse Studies
- Language Variation
- Language and the Media
- Computational Linguistics and Language Processing
- Corpus Linguistics and Corpus-based Studies
- Language Globalisation and Regionalization
- Cross-cultural Communication
- Intercultural Communication
- Crisis Communication
- Lexical Studies, Lexicography
- Translation and Interpretation
- Others

#### TRACK 7: LANGUAGE TEACHING, LEARNING AND ACQUISITION

- Language Curriculum Development and Assessment
- Language Teaching and Learning in Challenging Times
- Teaching 2nd, 3rd and Additional Languages
- Translanguaging & Transknowledging
- Literature in Language Education
- Language Teaching and Learning in the VUCA World
- Classroom Instruction and Pedagogy,

- Task-based Teaching and Learning,
- Designing Study Abroad and Mobility Language Programmes
- Content-based Teaching and Learning
- Content and Language Integrated Learning (CLIL)
- Materials Design and Development in Language Teaching and Learning
- Second and Foreign Language Pedagogy
- Language Teacher Education
- Language Teaching Methodology and approaches
- Language Skills Development (reading, writing, listening, speaking and literacy, fluency, formulaic language, vocabulary grammar, etc.)
- Language Assessment, Testing and Evaluation
- Technology in Language Teaching and Learning
- Learner Characteristics (motivation, anxiety, attitude, autonomy, strategies, non-instructed, individual factors or differences, emotion, etc.)
- Languages as Medium of Instruction, in Higher Education and Other Contexts
- Corpus Linguistics and Language Instruction
- Classroom Discourse and Interaction
- Designing and Developing Language Curricular for Persons with Disabilities/Special Needs
- Others

#### TRACK 8: EARLY YEARS LANGUAGE EDUCATION

- Early years Second Language Education
- Language Development in Early Years
- Language Teaching for Young Learners
- Language and Literacy Development in the Early Years
- Innovative Practices in Early Years Language Education
- Technology and Language Teaching in Early Years Education
- Teaching English and Other Languages to Young Learners
- First Language Acquisition
- Plurilingual Pedagogy in Early Childhood Education
- Language Teaching and Learning Materials Development For Young Learners
- Methods and Approaches for Teaching Early Years and Young Learners
- Language and Literacy in Early Childhood
- Designing Language and Literacy Activities for Early Childhood/Young Learners
- Language and Literacy Development in The Early Years for Children with

#### Language Impairment and Other Disabilities

- Others

#### TRACK 9: LANGUAGES AND THE MIND

- Psycholinguistics
- Neurolinguistics
- Language Processing
- Speech and Language
- Sign Language
- Bilingualism, Multilingualism
- Processing, Cognition and Language Learning
- Cross-Linguistic Factors, Disorders
- Others

#### TRACK 10: LANGUAGE TECHNOLOGY AND ARTIFICIAL INTELLIGENCE

- Language Resources, Tools and Applications
- Natural Language Processing (NLP)
- Digital Humanities
- Gamification in Language Teaching and Learning
- Language and Digital Technology
- Computer Assisted Language Teaching and Learning
- Artificial Intelligence in Applied Linguistics and Language Education
- Others

#### TRACK 11: LITERACY DEVELOPMENT IN LANGUAGE EDUCATION

- Language and Literacy
- Critical Literacies
- Developing Literacy Skills
- Vernacular and Indigenous Literacy
- Religious and Sacred Literacies
- Genre and Register in Multi-Literacies
- Others

#### TRACK 12: LANGUAGE EDUCATION POLICY AND MANAGEMENT

- Language Planning and Policy
- Language Cultivation in Developed Context

- Ecological Language Education Policy
- Language Planning Frameworks and Strategies
- Vernacular Language Varieties Planning in Educational Settings
- Mother Tongue Based Multilingual Education
- English as a Medium of Instruction
- Multilingual Education
- Others

#### TRACK 13: OTHER WORKS ON RESEARCH IN APPLIED LINGUISTICS

- Theory and Practice in Applied Linguistics and Linguistics Applied
- History of Language Teaching and Applied Linguistics
- History and Development of Language in Different Context, Regions, etc.
- Complex Dynamic Systems Theory (CDST) in the Study of 2nd, 3rd and Additional Languages Acquisition
- Approaches and Analysis in Morphology, Phonology, Syntax, Semantics, etc.
- Methods, Approaches and Collaborative Practices
- Research Methods and Methodologies in Applied Linguistics
- Others

#### TRACK 14: OPEN CALLS

- Open calls are dedicated to researchers who wish to present their research at the AILA 2024 Congress but who cannot find a track or topic related to their research work. The proposals should be related to either applied linguistics, linguistics applied, language teaching and learning and educational linguistics.

もちろん、これら 14 のカテゴリーに等しく発表者が属しているとは考えにくく、TRACK 7: LANGUAGE TEACHING, LEARNING AND ACQUISITION にその多くが集中していることは想像がつくが、それとて他のカテゴリーも立派にテーマを充実させており、応用言語学研究の一翼を担っていることが窺える。

ここで筆者が問題にしたいのは、応用言語学の肥大化そのものではない。同様の現象は医学や工学、生物学など、時代的な注目や技術の進展などから、より多くの研究者や研究が集まるようになる分野は応用言語学に限らない。したがってそれ自体が問題なのではなく、見方によっては分野の盛り上がりが見られ、衰退の一途を辿るよりは実に結構なことである。

既にこの問題は Cook(2015)、そして山中(2019)によってなされたことであるが、例えば Cook が取り上げた生物学との比較に典型的に表れている通り、生物学という大きな傘の元に入るいかなる下位分野であっても、そこには方法論の統一があり、学問的なスタンスやそのパラダイムが持つ「真

実(truth)」が共有されている。しかし応用言語学はどうだろうか。お世辞にも統一された学問パラダイムがあるとは到底思えず、研究の方法論もまちまちで、応用言語学独自のものもない。グランドセオリーもなければ、方法論的開発もない、まさに「現実の言語に関する問題」という緩い共通点だけで繋がっているだけの、「ごった煮的状况」になってしまっていることが問題なのである。

つまり、箱として機能はしているかもしれないし、その箱自体は大きなもので、一定の幅を利かせられるだけのボリュームなのかもしれない。しかしながら、あまりに箱の中がカオスなのである。本来であれば、箱の中に一定の秩序を見出すために、応用言語学とは何かということに関して、一定の方針や、場合によっては制約を設けるべきで、それ自体の研究や議論が本来必要であった。時にはそぐわない領域や分野を排除することで、際限なく肥大化し、無秩序へ突き進む今日の応用言語学という巨人に待ったをかけるべきなのであった。本来そうすべきであるのにそれができていない、これが世界的なレベルで起こっている。

なお、当該の根本的問題がもたらす現実的な帰結を一点指摘しておこう。例えば日本で応用言語学が学べる初めての大学院として、明海大学大学院に応用言語学研究科が設立された(<https://www.meikai.ac.jp/department-graduateschool/grad-applied-linguistics/>)。では明海大学では、先に示したような応用言語学の全てを網羅的に学べるのだろうか。あるいは、統一理論を欠いているはずの応用言語学を体系的に学べるとも言えるのだろうか。前者の問題を解決するには、考えられない数の教員を世界中から集めるべきであって、高田(1995)は、別の教育機関ではあったが、そのために鋭意努力したいことを述べている。これは現実的に無理な単なる夢物語であるし、世界中のどの応用言語学を掲げる大学院であっても、もはや制御できる範疇を超えている。後者の問題についても同様で、一研究機関が解決できるレベルを明らかに超えている。こうした根本的な問題を構図として抱えながら、肥大化する世界の応用言語学は学術研究を続けてしまっているのである。

#### <内因 1> 応用言語学研究が集える場所がない

ここまで論じた外因を背景に置きつつ、次に日本国内特有の要因について考えてみたい。まず、その筆頭が、応用言語学研究そのものや、研究者たちが集える場所が欠如していることを指摘したい。これは、日本が応用言語学研究というパラダイムで研究が十分に行えていないことに起因しており、分かりやすい言い方をすれば、応用言語学としての研究が未だ発展途上にある、あるいは未熟であると言えよう。

要因としては2点あると思われ、1点目は先に指摘したおおきな「箱」が用意できていない、すなわち日本中の応用言語学に関する研究群をくまなく蒐集できる装置が十分に整備されていないことである。もちろん先に議論したように、とにかく箱を用意して、その中でごった煮にすることが有意義かどうかは分からない。しかし、そもそもそうしたごった煮にすることすらできていないのであるから、この時点で日本の応用言語学研究は世界に比べて遅れを取っているとさえ言えよう。

なお本件に関しては、形式的には日本の英語教育の学会の筆頭である JACET(一般社団法人大学英語教育学会)が AILA の Affiliate Association として 1984 年 8 月より正式に認められて

いる。「JACET 通信」第197号によると、これは1か国から1学術団体のみに許されている団体資格で、記事執筆時点で34か国、34の団体が加わり、会員数は約8,000名とのことである。JACETの場合、日本応用言語学会としてJAAL in JACETを組織し、近年は毎年、独立した会合を行なっているが、規模はJACETの全国大会(国際大会)よりは小さく、日本中の応用言語学研究会を蒐集する母体とはなり得ていない。同様のことは学術誌(ジャーナル)についても言える。

今後は、このJAAL in JACETを日本の応用言語学研究の牙城となるよう、学術交流集会として整備し、内実を向上させていくことは一つの現実的な方略ではある。しかしながら、日本中に散らばった様々な応用言語学研究が集うためには、その理由や意義、さらに言えば各研究者にとってのメリットが見出せない限り難しい。次の論点とも繋がるが、これまでは、応用言語学研究のうちのあまりにも大多数が語学・外国語教育、とりわけ英語教育で占められてきてしまった。つまり、その他の応用言語学研究は「蚊帳の外」に置かれてきてしまった感が強いのである。こうした研究者にとって、あえて日本の応用言語学会に新たに出向いて研究交流をする必然性があるとは考えにくく、進めるのであれば、何か画期的な体制的組み換えが必要となる。

<内因2> 応用言語学=(ほぼ)語学教育という現状が応用言語学としての発展を阻害している

次に指摘する内因は、一部先述した通り、日本の場合、応用言語学研究の大部分が語学・外国語教育が数的にほぼ占拠している状態で、これによる弊害が考えられるという点である。Cook(2015)によると、これは諸外国でも基本的には変わらないことであるし、そもそも応用言語学は外国語教育の研究から出発したが、日本の場合はその度合いが極端であったとすることができるであろう。つまり、例えば英語教育の研究者は、自身のことを言語教育の研究者だとは思っても応用言語学の研究者だと認識してはおらず、同様に、バイリンガリズムの研究者も、神経言語学者も、語用論者も談話分析者も皆、それぞれが自身の専門性を狭い範囲で共有し、広く応用言語学としての認識を持ってこなかった。したがって、分野を跨いだ活発な研究交流は生まれず、日本の応用言語学としての成熟は成されてこなかったのである。

特に日本の場合、応用言語学研究のマジョリティを占める英語教育でさえ、JACETのほか、JASELE(全国英語教育学会)、JALT(全国語学教育学会)、LET(外国語教育メディア学会)などが存在し、それぞれに特徴を持たせつつ実質的に分裂してしまっている。複数の学会に研究者が所属すれば良いだけのことかもしれないが、年会費の負担などを考えても必ずしもメリットのあるやり方ではない。本来であれば、応用言語学の大きな傘の下、それぞれが緩くつながってこそシナジーも発揮できるというものだが、現実はこのような蝸壺の状況に陥っている。

どのような学会や、学問分野も、一定程度の規模を持つことで幅が生まれ、多様性が次への活力を生み出す。あくまで仮説上の想定であるが、これまでの日本の応用言語学研究は、語学・外国語教育以外の部分について、領域自体がマイナーで研究者も少ないため、十分な学術交流活動ができず、その結果研究の視座も狭くなり、活気も失われるという悪循環に陥っていたのかもしれない。そしてマジョリティを占める語学・外国語教育であっても、無用な分裂、細分化によって応用言語学としてのアイデンティティーをあえて持たなくさせてきたのが現状だと言える。これらは日

本の応用言語学研究の発展や展望を考えても決して良い動きであったとは言えないだろう。

### 3. 応用言語学研究の何が問題で、どう解決すべきか

ここまで、グローバルな応用言語学研究の趨勢を背景としながら、日本特有の応用言語学研究の現状と課題について指摘し、議論してきた。ここでは、今後の建設的な解決や改善に向け、若干の考察を行ってみたい。

前章ではやや踏み込んで、現状の応用言語学研究が抱える致命的な構図について議論した。この論点は、やはり今後どのような解決を見るにせよ無視できるものではないだろう。仮にはあるが、今後の日本の応用言語学が世界の動きに追従し、際限ない肥大化が成功したとしよう。次には、世界が辿ったものと同じ問題に日本が行き当たることは間違いないため、その際のシミュレーションは不可欠である。統一理論の欠如や方法論の不揃いについては世界の応用言語学とて同じであり、これらは今後世界的な議論を巻き起こし、日本も参画していく必要があるだろう。

日本の場合、その前段階にはなるが、今後、応用言語学の名の元に数多くの研究が集まる仕組みの構築を、まずは必然の改善として成すべきだと考える。しかしそのためには、このような他分野の研究の蒐集にどのような意味があり、どうしたメリットがあるのか、これを学术交流集会の担い手、つまり責任ある立場の者が認識できていなければ、決して日本の応用言語学研究は盛り上がりえない。現時点で、筆者にこれといったメリットを見つけることができないというのが正直なところである。もちろん、様々な視点を得ることによる多様性やシナジーの効果については一般論としては理解するが、これほどまでに取り扱う範疇が大きくなり、一見してもなかなか接点や関連性が見出しにくい場合も少なくない応用言語学の諸分野において、単にこれらを集めることでどこまで学会参加者が魅力を感じられるか分からないのである。当然学会には参加費や移動に関する諸経費はつきもので、こうした経済的負担を跳ね除けるだけの魅力が、単なる蒐集から生まれるのか、素朴に考えてもそうは思えず、ここに実務的で根本的な真の問題があるように考えるのである。

また別の観点で、日本の応用言語学研究や、それを支える学会活動は何らかの工夫を行い、独自の魅力を発揮できない限り、その存在意義を見出すことは難しい。これはある種のつひきならぬ事情であり、深刻で切実な問題でもある。というのも、個々の研究者にとって、日本の学会を經由せずとも、直接海外の学会で発表することは可能である。そして昨今、直接海外の語学教育系、応用言語学系の学会で発表する若手研究者は確実に増えている。海外で発表をするだけならば、年会費として学会に納める必要はなく、参加費だけで済む。しかも昨今はコロナ禍を経て、オンライン参加など、移動に関わる経費を極力抑えた参加も可能となってきた。言うまでもなく、国内学会や国内ジャーナルよりも、海外の学会発表やジャーナルの採択の方が「箔がつく」のであり、よほどのメリットが国内学会にない限り、はじめから海外を目指す研究者が続出してもおかしくない。これは一種の危機的状況であり、いわゆる学会そのものの存続にも関わる問題である。現時点で直ちに存続が危ぶまれる状況にはないからこそ、筆頭学会である JACET をはじめ、本問題に真剣に取り組む時が来ている。

とは言え、考えられる手段も無くはない。抜本的な解決には至らないと思われるが、以下3点ほど、応用言語学としての学会に意義を感じられるための工夫について述べておき、本章を閉じることにしたい。

<1点目> 共通テーマや issue をいくつか定める。

1点目は、応用言語学の学会として、いくつかの包括的なテーマや issue を定め、見るからに応用言語学の多くの下部範疇が関連するであろうプロジェクトを立ち上げることで、参加者に自身の研究が具体的に関連し得ることを理解してもらい、そこでの情報交換や共同研究への展開への道筋とすることである。

ただし、ここでの問題は、どのような大きなテーマを設定するかにかかっているところがあり、何度も指摘しているように、これだけ大きな諸分野を持つ応用言語学の、その全てに連関するようなテーマを紡ぎ出すことは実質的に不可能であろう。優遇される下位分野や研究者がいる一方で、そうではない場合を作り出してしまう危険性を孕んでいることも理解しておくべきであろうし、結果として、また散り散りになり、今度は二度と足を運ぼうとは思わないかもしれない。テーマ設定そのものが立派な研究分野となる可能性もあり、急ぎ取り組みながら改善する仕組みの構築が不可欠であろうし、様々なテーマで実際にやってみる必要があるだろう。

<2点目> 応用言語学キュレーターを養成する。

キュレーターという言葉がある。これは情報や資産を適切に集め、付加価値をつけるというキュレーション(curation)という英語から派生した言葉で、現在は美術館や博物館の学芸員がそう呼ばれることも多いが(cf. 山崎: n.d.), これは当該の分野だけに限らないはずである。そしてまさに、応用言語学のキュレーターが、今後は求められていくように思われる。

つまり、応用言語学研究に今後求められる追加の機能は、単に個々の分野で優れたテーマを設定し実績を上げることだけではなく、応用言語学全体の研究動向や研究内容をできるだけ把握し、個々の多岐にわたる応用言語学研究を繋いだり、シナジーを発揮させるための接点を見出し、助言したりすることなどができる「応用言語学キュレーター」を輩出することであろう。こうした動きは未だ世界的にもあるとは言えず、日本の応用言語学の学会にそのような機能が備わった場合、間違いなく新たなメリットとなり得る。

無論、これだけ肥大化した応用言語学の各分野に精通することは容易ではないだろうし、日々刻々と進化する研究のアップデート、世界的な応用言語学の研究潮流に追いつくだけでも大変なことであるため、キュレーターの養成をいかに行うかは喫緊の課題であると共に、筆者自身、これをどう行うことが効果的なのかは現時点で分からない。一方で、学会にそのような担当部署を設け、何らかの組織的取り組みを行うことで、このような人材を輩出していける可能性がある。いずれにせよ、応用言語学キュレーターが学会内で活躍することで、一見、関連性が全く見出せないようなかけ離れた研究間に共通の軸や接点が見出され、引いては大型の共同研究に繋がる可能性もある。「ごった煮」の中に秩序を生み出し、単なる「カオス」ではなく「宝の山」としての応用言語学とい

う箱の価値を高めるためにも、応用言語学全体をパースペクト(概観)できる人材の育成を真剣に考える価値は大いにあるのではないだろうか。

<3点目> 応用言語学研究ならではのモデルプロジェクトを実践し、成功例として残す。

1点目や2点目での提案は、成功モデルとして具体例が示されることで、はじめて説得力を持つように思われる。応用言語学キュレーターによる共通 issue をもとに、距離の縮まった応用言語学研究者らが新たなネットワークを構築し、これまでになかった研究を生み出したり、個々の研究者だけでは到底実現できなかった成果を創出し、実社会にインパクトを与える事例をいくつか見出すことが今後は必要になろう。

例えば昨今の生成 AI ブームであるが、生成 AI を駆動させる大規模言語モデル(Large Language Model)について日に日に関心が高まっている。谷口(2024)などは、集合的予測符号化と LLM の関係について考察し、新たな世界モデルのもとで人類がこれまで培った言語を捉え直そうとしている。こうした議論に、積極的に応用言語学がマイクロ・マクロのレベル貢献し、新たな言語観や、それに伴うパラダイムを提示することができてよいのかもしれない。こうした新たな研究プロジェクトを応用言語学のレベルで行うことは容易ではない。しかし同時に魅力的でもある。応用言語学研究の底力を見せる意味でも、これら1点目から3点目の実現に緊急に着手すべきであることを本稿として提案したい。

#### 4. おわりに

本稿では、日本の応用言語学研究の現状と課題を整理し、今後の発展のための方向性を検討した。日本の応用言語学は、世界的な潮流の影響を受けながらも、独自の発展を遂げる可能性を秘めている。しかしその発展を阻害する要因も現に存在しており、一筋縄にはいかない難しさがそこにある。

今後、日本の応用言語学がより多様な視点を取り込み、学問としての独自性を確立するためには、一層の研究面での深化とその発信が必要である。本稿が、日本の応用言語学の発展に資する一助となれば幸甚である。

#### 引用文献

- 若林茂則 (2022). 「応用言語学と英語教育研究」『中央大学文学部紀要』 130, 65-76.  
高田 誠 (1995). 「応用言語学をめぐる」『筑波応用言語学研究』 2, 1-8.  
谷口忠大 (2024). 「集合的予測符号化に基づく言語と認知のダイナミクス: 記号創発ロボティクスの新展開に向けて」『認知科学』 31, 1: 186-204. <https://doi.org/10.11225/cs.2023.064>  
山崎 賢司 (n.d.). 「キュレーターが潜在顧客との関わりをつくる」『しなやかな組織づくり: 次世代の経営・マネジメント』 1, TKP 研修ネット .  
<https://www.tkpkenshu.net/column/column01-011/>

- 山中 司 (2019). 「大学にもう英語教育はいらない: 自身の「否定」と「乗り越え」が求められる英語教育者へのささやかなる警鐘」『立命館大学人間科学研究』 38, 73-89.
- 山中 司, 神原一帆 (2023). 『プラグマティズム言語学序説: 意味の構築とその発生』(ひつじ研究叢書 言語編第197巻). ひつじ書房.
- 山中 司 (2021)「概説: Cook (2015) "Birds out of Dinosaurs -The Death and Life of Applied Linguistics-"」『立命館大学 理工学研究所紀要』 79, 13-21.
- Hall, C. J., Smith, P. H., & Wicaksono, R. (2017). *Mapping applied linguistics (2<sup>nd</sup> ed.)*. Routledge.
- Widdowson, H. G. (2000) On the limitation of linguistics applied. *Applied Linguistics*, 21, 3-25.